九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

小学校の日々から始まる雰囲気の解釈学的現象学

木下, 寛子

https://hdl.handle.net/2324/1806791

出版情報：九州大学, 2016, 博士（人間環境学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

（様式８）

氏　　名　：木下寛子

論文題名　：小学校の日々から始まる雰囲気の解釈学的現象学

区　　分　：甲

博　士　論　文　の　要　約

本論は，誰もが日常的に言及しうる雰囲気という現象について，ある小学校にボランティアとして参与する経験からその意味を問おうとする論考である。そこでは，雰囲気そのものをできるだけそのまま問うための道筋を求めることが試みられ，具体的には，事物や他者との関わり合いがその時々に多様な仕方で展開され続ける現場（小学校の日々）における雰囲気との出会いの様相が明らかにされた。

雰囲気が日常の生活で大きな関心事になることは，多くの人が経験するところであろう。しかしでは，こうして日常の関心事となる雰囲気とは何なのか。その問いは，日常の場においても学問の諸領域においても，明確な問題設定の下で充分に問われてきたとは言い難い。そしてその理由として，雰囲気に実体性がなく客体的に扱えない点に由来する方法的難点が挙げられた。

本論は，このような方法的難点が指摘される雰囲気を巡る論として，論全体の見通しを示す 1 章を前置きとした二部構成の全 6 章によって構成された。

「第 I 部　雰囲気の問いを巡る状況」では先行研究や実例の概観を通じて雰囲気を問うための準備的考察が行われ，雰囲気そのものを問う道筋を求めることの重要性が明らかにされた。

2 章では，学級雰囲気の心理学的研究について，1930 年代から 2010 年代まで，前史を含めてその歴史を概観した。学級集団・教室は，雰囲気を巡ってきわめて多くの研究枠組みが提起される舞台となったが，本章ではその背景に，全国に数多く存在するために学級集団が集団研究の恰好の実験場になったことや，教育現場の在り方に即して現実的な知見をもたらそうとする動向があったことを明らかにした。そして一連の研究の展開が大きく 3 期（3 群）で捉えられることを示した。即ち，実験的に雰囲気を取り上げる方法が模索された第 1 期に始まり，1940 年代以降の類型論的測定方法が模索された第 2 期を経て，人格論に影響を受けて特性論的測定方法が提起された第 3 期が 1960 年代後半に始まり現在に至る展開である。そしてこの歴史はもっぱら取扱いにくい雰囲気を取り扱えるようにする測定方法開発の歴史であったが，そこでは現場に資する知見を生み出す上で必要となる雰囲気の意味の理解が不問に付されてきたことを指摘した。そして雰囲気研究に必要な今後の方向性が，人が生きる場にとっての雰囲気の意味を問う解釈学的な道筋にあることが展望された。

3 章では，この展望を受け，雰囲気の意味を明らかにするための道筋をいくつかの試みと共に検討した。第一に，雰囲気を素朴に記述しようとする例として質的研究の記述を取り上げ，第二に，参与する小学校での先生達の言動で，雰囲気を巡る理解が著者にも端的に見出される契機となったものを，出来事として記述的に取り上げ，そこから記述や言及の行為に見出される雰囲気の意味を示す試みを展開した。いずれの試みからも見出されたのは雰囲気を巡る素朴な理解であったが，その記述や言及には自覚の有無を問わず雰囲気が対象化され客体的に捉えられる成り行きが生じてい

ることが明確になった。このことから本論における最重要課題が，対象化の道筋を退けて雰囲気そのものを問う道筋を求めることにあることが確認された。

4 章では，3 章で明確化された課題に向け，「事象そのものへ」の格率で知られる現象学に可能性を求めた。具体的には，現場から現象学的に事象を問う道筋を辿った試みとして，発達心理学領域から鯨岡峻の「発達－現象学的アプローチ」，そして精神医学領域から臨床診断に関する H.C.リュムケの「出会いの現象学」を取り上げ，両者における事象の問い方を検証した。前者からは場への関与と記述方法の在り方について，後者からは対象化せずに問う道筋について，大きな可能性と手掛かりを得つつ，結局，雰囲気そのものを問うには，問う者が問われている事柄に導かれて自ら道筋を見出すこと，即ち，自らの問う行為を通じて可能性を掴み取ること（Heidegger, 1927/1998）よりほかに方法がないことを再確認した。

続く「第 II 部　雰囲気を問う道筋」では，第 I 部の議論を受け止めつつ，実際に雰囲気を問う道筋を求める試みが展開され，その意義と到達点が考察された。

5 章では，参与する小学校において雰囲気が言葉になった出来事において大きく雰囲気が問われ始めた経験に従い，その道筋を見出そうとした。具体的には，特別支援学級と交流学級を行き来するひとりの子どもに付き添い，交流先の教室に入れずに共に引き返した出来事（振り返れば「教室に入れる雰囲気ではなかった」と言いうる出来事）を取り上げ，その出来事の意味を解きほぐすことで展開された。この時，雰囲気を問う上で基礎となった小学校への参与は，小学校の日々に自らもその中の一人として与するものであった。そしてその参与の特徴を，小学校の場から先行的に一定の制約を受けつつもその場や自らの在り方について予め規定せずに，その時々で事物や他者に出会って意味をその都度解きほぐしつつ行為する者としてそこに居ることとして明確化し，これを対象の理論的認識方法としての参与観察とは区別して「出会いの解釈学」と呼んだ。雰囲気を問う道筋はこの参与に，一見個人的な経験で，意義も形式も不明瞭な問いである「未精製の問い」が生じると共に始まった。つまり，小学校の日々において，話し問うべき何か大事な事柄として見出された雰囲気について，問いとしては未分化ながらも問われた経験の通りに話し問おうとする行為の遂行に，やがて雰囲気の意味が明確になる「雰囲気の解釈学的現象学」としてその道筋は展開された。その際，具体的に取り上げられた出来事は，（分析対象のデータではなく）話されるべき事柄として自ずと汲み取られた挿話として受け止められており，その出来事がその通りに言葉になるよう注意を払われるうちに，話されつつあることの趣旨が明確になることが期待されるものであった。

終章（6 章）では，本論全体の試みの到達点が検討された。この試みを通じて，雰囲気は教室の場をその時々の仕方で開き直す「開顕性」という動的な性格として理解された。そしてこの性格が，子どものための場としての学校・教室の成否に深く関わる点を指摘して，学校現場にとっての雰囲気の意義を明らかにした。また一連の試みから，対象化せずに問う行為，およびそれが展開する参与（出会いの解釈学）の場の可能性を提起した。この道筋は問いとの出会いに依拠する点で，学問上の常識的な方法からは逸脱する道筋であるが，参与の経験を丸ごと引き受けて問う道筋を開く可能性があり，導かれる知見には，同じ時代や場所を生きる人に新たな視角を開き，場や事柄の理解を刷新する大きな可能性が見出された。最後に論全体を振り返り，対象化して／せずに問う行為の根本的な相違が問いとの出会い方にあり，前者においては問う行為が予め理解され，教室をより良くするような道に，後者においては出来事や経験の意味開示の道に本領があることを明確化した。その上で，本論が書かれたものとして現場にあらためて受けとめられるとき，それが何をもたらすかを巡る帰結の見極め難さが，本論の臨界点であることを示した。